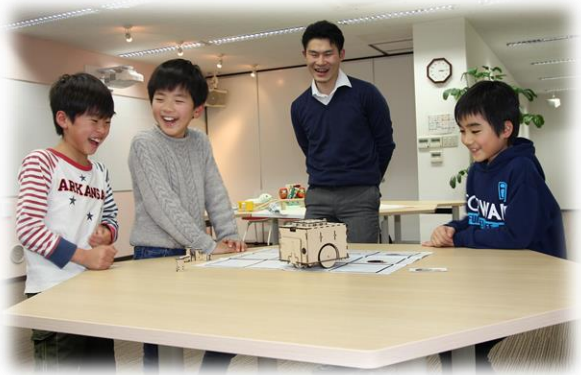
RoFReC（ロフレック）

活動エリア
広島県三原市を中心とする近隣エリア

活動目的
全ての子どもたちが、テクノロジーを通して、楽しみながら未来を切り開く力をつけられる環境を創る。

基本方針
「地域づくりは人づくり」という考えで活動する。



プログラミング教室

教育の情報化支援

フォーラム

背景（広島県三原市）

450年前

智将　小早川隆景

高度経済成長期

現在

（2018～）

・「浮城」の異名を持つ三原城の城下町
・瀬戸内海を掌握
・軍事的・経済的中心地

・広島県の交通の要衝（陸・海・空）
・重厚長大産業
・企業城下町として備後圏の中心地

背景（広島県三原市）

20年前の駅前風景

現在の駅前風景

長期的ビジョン

IT・スタートアップ集積地域

継続・浸透・発展

サービス、流通、小売り、製造、建設等あらゆる事業領域で、IoTやICT等の新規事業が次々と生まれるアジアのシリコンバレーMIHARA

商店街×プログラミング教育

三原モデル完成（２０１９年）

IT起業都市をなぞらえて、
“〇〇のシリコンバレー” と称される地域

RoFReC発足（2018年）

私たちの目指す未来の絵姿

ICTやIoTで垣根をこえた、あたたかみのある地域コミュニティ

すべての人が住みやすく、すべての人が精神的に豊かに暮らすまち

メディア掲載実績①

2018.8.23.

日（木曜日）　中国新聞　（第三種郵便物認可）

尾三

尾道支局 ☎0848(22)5258 FAX(20)0052
三原支局 ☎0848(62)3676 FAX(60)0094
因島ステーション ☎0845(22)0766 FAX(26)0017
世羅支局 ☎0847(22)0372 FAX(25)0017

ロボホンでIT人材育成

三原の協議会 26日から講座

動きやせりふを簡単に入力できるロボット型携帯電話「ロボホン」を使い、小中学生がプログラミング技術を学ぶ取り組みが三原市で始まる。一般社団法人「RoFReC」（ロボット・ドリーム研究会、三原市中之町）や市、三原商栄会連合会など6団体が協議会を結成。IT教育や地域活性化につなげる。（政綱宣規）

ロボット電話のロボホン

小中生にプログラミング

ロボホンはパソコンの専用ソフトから動作を選んだり、あいさつのせりふを入力したりすると指示通りに動く。コード入力を必要とせず、プログラミング技術を分かりやすく学べる。

小中学生向けの講座は26日から始まる。RoFReCの岡田吉弘代表(33)たちが指導。年末まで計5回、各回40人が8台のロボホンと20台のパソコンを使い、プログラミングを基礎から学ぶ。プログラミングしたロボホンは飲食店などに置き、接客や案内をさせる計画だ。

発達障害の子どもを対象にした講座も開く予定で、「計50人の未来のIT人材育成を目指す」とする。高校生以上を対象にした指導者も育てる。

総務省が公募した本年度の「地域におけるIoT（モノのインターネット）の学び推進事業」の一環。RoFReCが中国地方で唯一採択され、8月上旬に地元協議会を発足させた。

岡田代表は「三原発のITの学習モデルを確立させ、まちの次世代を担う人材を育てたい。楽しみながら技術を習得してほしい」と期待を込める。

協議会で事業の概要を説明する岡田代表（奥）

ロボホン　シャープが開発した世界初のロボット型携帯電話。高さ19.5㌢、重さ390㌘。データを入力することで逆立ちやダンスなどの動きや、なぞなぞなどの会話ができる。英語や中国語にも対応している。

クリック

中国新聞　2018年8月23日

メディア掲載実績②

2019年（令和元年）10月9日（水曜日）　中国新聞

もうすぐだね プログラミング授業

だるま自在 三原で教室

三原市で名物のだるまを使った小学生向けのプログラミング教育が、始まっている。来年度から小学校でプログラミングが順次必修になるのを前に、地元の一般社団法人などが企画した。IT技術の習得と郷土文化の親しみにつなげる。

9月下旬に開かれた初の教室には、児童10人が参加した。高さ約25センチの特製だるまに取り付けた、7色の発光ダイオード（LED）と加速度センサーをパソコンに接続。だるまが転ぶ動きに合わせ、LEDの点滅パターンをプログラミングした。児童は「かっこよく光らせたい」と試行錯誤しながら完成させた。

三原小4年藤岡侑吾君(9)は「思い通りにできた。授業が楽しみ」と喜んだ。

プログラミング教育を手掛ける一般社団法人「RoFReC」（ロフレック、同市城町）と三原だるま保存育成会、市内外のデザイナーが協力。同法人の岡田吉弘代表(34)は「楽しむことを第一に、技術に親しむ場をつくりたい」。育成会の鳥生悦郎代表(78)は「地域の歴史や伝統に興味を持つきっかけにしてほしい」と期待する。

市内の小学校では6年生の必修化に向け教材の準備を進めている。市教委学校教育課の三村章文課長は「民間の取り組みと知識を共有し、スムーズな導入を目指す」と話している。

（政綱宜規）

だるまを使ったプログラミングに挑戦する児童

中国新聞　2019年10月9日

メディア掲載実績③

市民の広場

若者×情熱
ミハラのチカラ

STORY 33

プログラミングの魅力を子どもたちに伝えたい

一般社団法人ロフレック代表理事　岡田吉弘（おかだよしひろ）さん

「やったぁ。動いた」。ロボットが動き出すと、教室のあちこちから歓声が上がりました。集まったのはコンピューターに特殊な言語で指示を出し、思い通りに動かす「プログラミング」を学ぶ小学生。指導するのはプログラミングを通じてまちを活性化させようと取り組んでいる岡田吉弘さんです。

三原市出身の岡田さんは大学でプログラミングを学び、エンジニアとして総合材料メーカーに就職。主に新製品の開発や、海外の事業所での技術指導などに携わっていました。

▶子どもたちにプログラミングを教える岡田さん

仕事で活気にあふれた異国のまちを訪れるたび、「自分の故郷である三原を再び元気なまちにしたいという思いがどんどん強くなった」と言います。

そこで、地域活性化について学ぶため、思い切って会社を辞め松下政経塾に身を投じました。研究を進めるうち地域におけるIT教育の重要性に気付いた岡田さんは、大学院でさらに学びを深めた後、昨年4月に神奈川県からUターンしてプログラミング教室などを運営する会社を立ち上げました。

現在は市や関係機関と連携し、2020年から全国の小学校でプログラミング教育が必修化されるのに備え、先行してカリキュラムづくりに取り組んでいます。昨年は小・中学生を対象としたプログラミング講座を複数回実施。子どもたちがプログラムした接客ロボットは市内の商店などに置かれ、お辞儀したりあいさつしたりして来店客を迎えました。

「単に知識や技術を身に付けるだけでなく、学んだことが人の役に立ち、人を笑顔にできる学びの場を提供したい」と岡田さん。一部の小学校で授業を行う予定もあり、活動の範囲を広げています。「プログラミングを身に付けた子どもたちが、いつか三原の活性化に力を貸してくれたら」。そんな夢を持ってプログラミングの魅力を人々に伝えています。

※このコーナーでは、スポーツや文化・芸術活動などに情熱を注ぐ若者や子どもたちを紹介します。

広報みはら　2019年2月号